平成 29 年 7 月 20 日(木)
練馬区立開進第四小学校
校 長 佐 々 木 秀 之

日本の伝統文化　＜涼を呼ぶ＞

校　長　佐々木　秀之

最高気温が 30 度を超える真夏日が続くようになり、一昨日の熱雷とともに梅雨が明けました。

さあ、夏本番！　この高温多湿の夏を如何に乗り切るかに頭を悩ませていたことは、今も昔も変わりありません。いよいよ 42 日間の夏休みが始まります。暮らしの中で涼を感じ、暑い夏を快適に過ごす工夫を先人たちに学び、お子様とともに充実した夏休みをお過ごしください。

＊

＜風鈴＞　「ゆらぎ」と呼ばれる不規則ながらも小川のせせらぎや小鳥のさえずりなどと同じ心地よい音色を奏でる風鈴は、目と耳で涼を感じさせてくれます。一瞬のそよ風に乗って、軽やかにたゆたう風鈴は、蒸し暑い日本に暮らす庶民が考え出した、納涼の知恵の結晶ともいえるでしょう。軒先で、「いい音色ですね」などと、言葉を交わす時代ではなくなってしまいましたが、風鈴の奏でる音色から涼を感じとる、そんな心のゆとりをもちたいものです。

＜団扇（うちわ）＞　竹に紙を貼る団扇ができたのは近世のことで、古くは植物を編んでつくり、神を招く依り代（よりしろ）の象徴でもあったそうです。優美な絵模様を描いた京団扇や、浮世絵などを貼った江戸団扇、また、見た目が水のように透けており、昔は水につけて気化熱で涼む岐阜の「水うちわ」など、さまざまな団扇がつくられています。今は、企業の広告を多く目にするうちわですが、古来より伝わる団扇を見て夏を楽しむのもよいかもしれません。

＜花火＞　夏の風物の花火です。今でも続く隅田川の花火大会は、江戸で疫病が流行し、多くの犠牲者が出た翌年（1733 年）に、慰霊と悪疫除災祈願を兼ねて、夏の川開きの日に打ち上げられたのが始まりだそうです。漆黒の大空に繰り広げられる幻想的な光の世界に浸ると、蒸し暑さや日頃の悩みも吹き飛びます。また、線香花火の小さな輝きを見つめ、もの思いにふけってみるのも夏ならでは…。

＜金魚＞　水の中でヒラリと尾びれを揺らめかす姿で、目を楽しませてくれる金魚は、夏の季語にもなっています。ガラス鉢の中に映し出される金魚の姿は、室内でも涼しげな水辺の雰囲気を楽しませてくれます。毎年、8,000 匹もの観賞用金魚が魅了する鮮やかな水中アートイベントも夏に開かれるほどです。

＊

先人たちは、水や風、植物など自然のもつ恵みや長所を上手に利用して、夏を涼しく過ごすために知恵を絞ってきました。日本人は感覚が鋭く、微細であることを表しているとも言えます。どうぞ我が家の工夫をし、暑い夏を体調を崩さずにお過ごしください。そして、9 月に元気に登校してきた子供たちから、「かけがえのない夏休みだった」という声が聞こえてくることを願っています。